

## 30周年の再出発に期待を込めて

前基礎生物学研究所長  
勝 木 元 也

平成13年4月から平成19年3月までの6年間、再任の2年間を含めて、私は基礎生物学研究所の所長を勤めました。九州大学生体防御医学研究所教授の時代から、運営協議会委員をお引き受けし、東京大学医科学研究所に移った後には運営協議会委員であるとともに客員教授も併任していましたので、大学共同利用機関についてはよく知っているつもりでした。しかし、平成11年に始まった橋本内閣の行政改革の波は、大学共同利用機関にとって最も重要な学術研究の構造を変えかねないことを、所長就任から程なくして思い知らされました。

その後3年間にわたって続けられた、文部科学省におかれた大学共同利用機関のあり方についての検討委員会や、大学共同利用機関所長懇談会、そして5機関による自然科学研究機構形成までの30回を越える会議を経て、平成16年4月に大学共同利用機関法人自然科学研究機構が発足したのです。私の所長在任期間のほとんどは法人化によって、基礎生物学研究所の本来の姿を壊すことなくどのように発展させるかを考え、発言し続けるものでした。その経緯は、この30周年記念の文集には書き切れません。

この間、痛感したことは、文部科学省を含め、大学関係者の間にも大学共同利用機関とはいかなる組織で、どのような存在なのかを知る人が少ないことでした。特に「共同利用」というと、一堂に集まって利用する装置や場所の存在だけがイメージされて、肝心の研究者コミュニティによる自立的運営という意味の共同利用が完全に忘れ去られることです。それは今も続いているように思います。困ったことに、評価する側の委員にも認識が薄い方もいらっしゃるようです。

さて、今回の法人化において、最も重要なことは、大学共同利用機関が、独立行政法人ではなく、国立大学法人と類似の法人として認められたことです。私が所長になる前には、大学共同利用機関を独立行政法人にしようとする動きがありました。当時の所長懇談会は総務省に乗り込んで、大学と同じ組織形態であることを堂々と主張し、独立行政法人化を阻止したと聞いています。なぜ独立行政法人であってはいけないのか。それは、大学には、長期的、継続的視野に立った教育と、個人の問題発掘を基盤とする自由発想型の研究を特徴とする「学問の自由」が保障されているからです。そして、それを守るための「大学の自治」が確立しているからです。独法化ではなく、法人化と言うのに拘るのは、このような重要な理由があるのです。

そもそも大学は経済効率を第一に考えるべき組織ではありません。大学が社会から付託されている最も重要な役割は、科学的にも文化的にも国を豊かにする指導層を形成する人材の養成です。しかも次代の指導層ですから、現状の無批判な肯定だけでは、きっとすぐに時代遅れになるでしょう。浮き

草のような現状を少し離れて、静かに、落ち着いて、深く考えを巡らし、自ら信じるところを発言し、批判を受けながら、未来の人材に成長の場を提供するのが大学ではないでしょうか。その際、自らの拠って立つ基盤をも批判することが重要ですから、「学問の自由」が、大学の最も重要な理念です。その自由を保障するために、拘束権を持つ権力の介入を許さない「大学の自治」が、先人たちによって確立されてきたのです。

しかし、法人化から三年が過ぎて、「学問の自由」を芯として、新しい大学法人に生まれ変わったのでしょうか。大学共同利用機関法人に、高い精神性を持つ存在感が備わったのでしょうか。はなはだ疑問といわざるを得ません。

その原因の一つは、「評価」という大学法人にとっては、その特殊性においてあまりにそぐわない短期的に過ぎる制度が力を持ちそうなことです。

私は、所長に就任したとき、大学共同利用機関には、高等研究機関としての活動だけではなく、その存在自体に、それを支える学問を志す者たちの憧れや、希望、未来に向かっての強い開拓の精神性が必要ではないかと感じていました。そのようなものが、誰によってどのように評価されるのでしょうか。しかも数値化できる資料を基にしたときに、評価される側の理想とは異なる方向へと誘導されてしまうのではないかと心配です。

唐突ですが、我が国には、外国人を唸らせた多くの文化遺産があります。その一つ、桂離宮には、静かに、落ち着いた、深い精神性を感じさせる佇まいがあります。ブルーノ・タウトをして「泣きたいほどの美しさ」と言わしめた桂離宮は、16世紀の後半に、八條宮智仁親王（桂宮）に拠って造られました。そのとき、京の名匠たちに誓約させたという三つの事項を、阿川弘之氏の随筆で読んだのは、法人化の骨格がほぼ決まった平成15年11月のことでした。

一、労賃を吝（おし）む勿れ

二、成功を急ぐこと勿れ

三、完成まで来り観ること勿れ

無駄と装飾とを極限までそぎ落とした桂離宮という美の創出と同様に、創造的な学問体系の創出には、ここに掲げられた3つの精神が必要ではないのか。

経済効率をまず考え、目標設定を細かくして成功の道筋をあらかじめ設定し、目標達成まで細かく口出しするという、今後ありそうな事態を想像すると、何のための法人化であったか、取り返しがつかない破断的な状況ばかりが想像されて仕方ありません。何もかにもが市場原理の競争主義で生き残りを試されるのは、創造的なすべての活動にとって、もっとも困難な時代を迎えていると言えるでしょう。

30周年を迎えるに当たって、困難な時代を乗り越えるには、学術の志を高く掲げて邁進するしかないことを強く感じています。